

『国文研究』回顧

山本捨三（丘南）

以国文研究昵近 国文研究を以て昵近す

迎五十年省当初 五十年を迎え当初を省みる

学徒来集銀杏地 学徒来り集る銀杏の地（熊本）

砥礪可期出藍蒼 砥礪期す可し出藍の蒼

日本語日本文学科の『国文研究』が通巻五十号を迎える
と聞き、まず右の漢詩を以て祝意を表します。同時に一文
を求められ回想の筆をとりましたが、九十四歳の耄碌の記
憶ですから誤りがあればお許しください。

ぼくが本学の前身熊本女子大学に赴任したのは昭和三十
三（一九五八）年でしたから、当時もうこの研究誌は存在
していました。創刊号の頃のことは知りませんでした。

聞き知ったことは、国文談話会の名にふさわしく、当初の
方針を学生と先生方との研究と親睦を兼ねて、学生の学習
助長と研究指導を目的として、主に各先生が推薦する優秀
な卒業論文を掲載し、そのかたわら先生方の研究を添える

という形だったようで、村中主任教授のもとで本田教授が
編集にあたっておられました。そういう事情でしたから、
執筆するぼくらとしては幾分くつろいで書くことができました。
科にはほかに「国語国文学論集」という先生たちだ
け（？）の論文集もありましたので。そして編集はずつ
と本田先生でした。それは後に村中先生が学部長・学長に
なられ、ぼくがその後をうけて主任教授・学部長となり、
本田先生が主任教授になられても、編集はいつも本田先生
でした。それはそれとして学生たちは『国文研究』に自分
の卒論が掲載されることを誇りにしていたようです。ぼく
は卒論指導も講義も自己の論文執筆も近代文学でした。

もちろん『国文研究』にはその年度の講義題目・卒業論
文題目が載せられたほかに、親睦会・研究旅行・卒業予餞
会などの情報も載りました。ついでの話ですが、広く見る
と上代文学から近代文学に至る研究旅行や文学散歩は学生
の知識興味を学問的関心にまで高めるとともに、師弟親睦

の実をあげえたものとして、今でも楽しく思い出されます。ただ在職中親しくしていただいた、熊本女子大学国文学科の草創期から中期にかけての村中・本田・古沢・迫・鶴・神部・一瀬各先生方のうち村中・本田・一瀬各先生及び助手だった枝元さんがすでに故人になられたことはとても寂しいことです。また五十年の間に残念にも他界された科の卒業生の方々のご冥福をお祈り致します。

ぼくが昭和五十年定年退職で熊本を去りまして以来三十年に及ぼうかと思えます。先年大学の組織が変わり男女共学大学として、大学名・学科名・校舎・所在地も現在のようになり変わりましたが、『国文研究』が現実にも五十年も長生きしていることを知り、今更のように感動しながらその将来を期待しております。

(平成一六・一一・二〇)